

琉球大学学術リポジトリ

グローバルに展開する沖縄県系人の組織的活動 — WUBを事例として—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 沖縄県系人, ネットワーク, ビジネス交流 キーワード (En): WUB, Okinawan descents group, Network, Business exchange 作成者: 宮内, 久光, 仲本, いつ美, Miyauchi, Hisamitsu, Nakamoto, Itsumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010118

正誤表

p.102 表 1

誤

年	月	会議／大会(開催地)	会議・大会の特徴	設立支部
1990	8	第1回世界のウチナーンチュ大会		
1993		HUBの設立		
1995	11	第2回世界のウチナーンチュ大会		
1997	9	第1回WUB代表者会議(ハワイ)	WUBの設立	ハワイ, 沖縄, ブラジル, アルゼンチン
1998	2	WUB代表者会議(ハワイ)	WUB正式名称の決定	ペルー, 中国
	6	第2回WUBエグゼクティブ会議(ブラジル)	世界本部・支部組織名の決定	
1999	6	WUBエグゼクティブ会議(ロサンゼルス)	様々なビジネス構想が議論	北米, 東京, グアム
	8	第3回WUB世界大会(ロサンゼルス, ラスベガス)	初の世界大会開催	
2000	6	第4回WUB世界大会(沖縄)	ビジネス交流商談会が初開催	関西, ボリビア
2001	10	第5回WUB世界大会(東京)		香港, ヨーロッパ, シンガポール
	11	第3回世界のウチナーンチュ大会		台湾, カナダ, タイ, メキシコ
2002	10	第6回WUB世界大会(ボリビア)	最大の大会参加者	マレーシア, マウイ
2003	8・9	第1回世界のウチナーンチュ会議(ハワイ)		フィリピン
	9	第7回WUB会議(ハワイ)		
2004	8	第8回WUB世界大会(アルゼンチン)		
2005	4	第9回WUB世界大会(関西)	WUBと米州開発投資公社(IIC)が 互助協力の覚書に調印	
2006	1	第10回WUB世界大会(ペルー)		
	10	第4回世界のウチナーンチュ大会		
2007	9	第11回WUB世界大会(上海)	WUB創設10周年記念大会	
2008	8	第2回世界のウチナーンチュ会議(ブラジル)		
	8	第12回WUB世界大会(ブラジル)	WUBネットワークに名称変更	
2009	8	第13回WUBエグゼクティブ会議(ロサンゼルス)		
2010	10	第14回WUB会議(ハワイ)	ウチナーンチュスピリット議論	
2011	10	第5回世界のウチナーンチュ大会(予定)		宮古

正

年	月	会議／大会(開催地)	会議・大会の特徴	設立支部
1990	8	第1回世界のウチナーンチュ大会		
1993		HUBの設立		
1995	11	第2回世界のウチナーンチュ大会		
1997	9	第1回WUB代表者会議(ハワイ)	WUBの設立	ハワイ, 沖縄, ブラジル, アルゼンチン
1998	2	WUB代表者会議(ハワイ)	WUB正式名称の決定	ペルー, 北米
	6	第2回WUBエグゼクティブ会議(ブラジル)	世界本部・支部組織名の決定	
1999	6	WUBエグゼクティブ会議(ロサンゼルス)	様々なビジネス構想が議論	東京, グアム
	8	第3回WUB世界大会(ロサンゼルス, ラスベガス)	初の世界大会開催	
2000	6	第4回WUB世界大会(沖縄)	ビジネス交流商談会が初開催	関西, ヨーロッパ, ボリビア
2001	10	第5回WUB世界大会(東京)		カナダ, 中国, シンガポール
	11	第3回世界のウチナーンチュ大会		マレーシア, タイ, 香港
2002	10	第6回WUB世界大会(ボリビア)	最大の大会参加者	メキシコ, マウイ, 台湾
2003	8・9	第1回世界のウチナーンチュ会議(ハワイ)		フィリピン
	9	第7回WUB会議(ハワイ)		
2004	8	第8回WUB世界大会(アルゼンチン)		
2005	4	第9回WUB世界大会(関西)	米州開発投資公社と互助協力の覚書調印	
2006	1	第10回WUB世界大会(ペルー)		
	10	第4回世界のウチナーンチュ大会		
2007	9	第11回WUB世界大会(上海)	WUB創設10周年記念大会	
2008	8	第2回世界のウチナーンチュ会議(ブラジル)		
	8	第12回WUB世界大会(ブラジル)	WUBネットワークに名称変更	
2009	8	第13回WUBエグゼクティブ会議(ロサンゼルス)		
2010	10	第14回WUB会議(ハワイ)	ウチナーンチュスピリット議論	

p.103 22 行目

誤 翌 1998 年にはペルーと中国で、1999 年には北米、東京、グアムの各支部が設立された。

正 翌 1998 年にはペルーと北米で、1999 年には東京、グアムの各支部が設立された。

p.105 10 行目

誤 発展期における支部設立状況を表 1 からみると、2000 年に関西、ボリビアが設立されたのに続いて、2001 年には香港、ヨーロッパ、シンガポール、台湾、カナダ、タイ、メキシコと 7 支部が設立された。

正 発展期における支部設立状況を表 1 からみると、2000 年に関西、ヨーロッパ、ボリビアが設立されたのに続いて、2001 年にはカナダ、中国、シンガポール、マレーシア、タイ、香港と 6 支部が設立された。

p.105 24 行目

誤 その後、2002 年にマレーシア、マウイ、フィリピンの各支部が設立されたあとは、海外支部が設立されていない。

正 その後、2002 年にメキシコ、マウイ、台湾、2003 年にフィリピンの各支部が設立された後は、海外支部が設立されていない。

※この正誤表は、2014 年 6 月 20 日に追加されました。

グローバルに展開する沖縄県系人の組織的活動 －WUBを事例として－

宮内久光・仲本いつ美

- I. はじめに
- II. WUBの展開と活動
- III. WUB支部の会員と活動
- IV. WUBの機能と支部の役割
- V. おわりに－WUBの空間性

キーワード：WUB，沖縄県系人，ネットワーク，ビジネス交流

I. はじめに

1. 研究目的

移民やその子孫は、移住先で特色あるコミュニティ、すなわち民族系住民集団（エスニック集団）の社会を形成する。杉浦（1991）によると、一般にその存続、発展の基本的戦略として、集団内で様々な相互扶助や共同活動を行い、そのための組織や制度を発達させてきた。日本人移民や日系人もその例外ではない。このようなエスニック集団はさまざまな民族組織を設立・運営する。それらはホスト社会の中で自らの利益を守るための自己防衛機能を持つ組織であったり、独自の文化と社会を維持・継承したり、日常生活を円滑にするために組織される（矢ヶ崎 2008）。

地理学における民族的組織に関する研究は、カリフォルニアの日本人農民の民族的組織を検討した矢ヶ崎（1980; 1983）や、アメリカにおける民族的組織の性格を検討した杉浦（1991）がある。また、チャイナタウン研究で山下（1987; 1988; 2002）が華人の民族的組織の拠点である「会館」の機能や、近年の「会館離れ」な状況を明らかにするなど、それぞれホスト社会における民族的組織の役割を明らかにしている。いずれにしても、対象とする各民族的組織が活動する空間範囲はローカルレベルやナショナルレベルである。

しかし、1990年頃から、民族的組織の空間スケールにも変化がみられるようになる。すなわち、移民集団による世界的な民族的組織¹⁾、特にビジネス組織のネットワーク化が図られるようになったのである。このようなグローバルレベルで展開する民族的ビジネス組織として、中国系とインド系の組織があげられる。

例えば、中国系については、1991年に世界華商大会が立ち上げられた。同年8月にシンガポールで開催された第1回世界華商大会では、世界30カ国・地域の80都市から800人

の華商と呼ばれる中国系のビジネスマンが一堂に会してビジネス交流を行った²⁾(陳2001)。1992年にはインドパスポート保持者で中産階級か上流階級に属する専門化や実業家を中心とし、インドへの投資に関心を持つインド系移民の組織である世界NRI協会³⁾(World NRI Association)が発足した(広瀬2007)。同じく1992年にはアメリカ西部のシリコンバレーでT i E (Talent, Idea, Enterprise)が創立された。T i Eはインドにルーツを持つ企業経営者や役員の組織であったが、2007年になると1,400人の正式会員と1万人余りの準会員を抱え、9カ国に44の支部を持つ世界的なビジネス組織に成長した(広瀬2007)。彼らはインドでの起業を計画している実業家にアドバイスをしたり、インドで経営者を集めて講演会を開催したりしている。このように、経済のグローバル化に対応して、民族的ビジネス組織もグローバル化する傾向にある。

このようなグローバルな動きに対応するように、世界に散在する沖縄県系人たちも、1997年にWUB(ワブ)と称するビジネス組織を作り上げた。WUBは現在22支部を擁しており、世界に散らばる沖縄県系ビジネスマンを中心とした人々が、ローカルレベル(支部内)で、そしてグローバルレベル(支部間)でさまざまな交流をもっている。

WUBに関する先行研究として、白水(2006)がWUB関係者に聞き取りを行い、WUBの設立経緯、現状、そして展望をまとめている。ただし、白水はWUB組織そのものではなく、ウチナンチュを結びつけた場として関心があり、聞き取りは沖縄においてWUB沖縄支部の幹部や、WUBを取材してきた記者などに行って考察している。そのため、WUB沖縄以外の支部の活動や支部間の結びつき、WUB組織全体の活動と支部の役割などについてはあまり触れられていない。本稿はWUB組織そのものに関心があるため、このような世界規模で展開する民族ビジネス組織を理解するためには、ローカルな活動とグローバルな活動という空間スケールを意識して具体的な活動や結びつきを考察しなければならないと考えている。さらに、後述するようにWUBの活動目的自体が、白水が調査した時とはまた異なった状況になってきている。

そこで、本稿では、日本国外の沖縄県系人が主体となって設立されたWUBに焦点をあて、その設立から現在までの世界組織および各支部の活動、支部会員の特徵、世界組織と支部の機能と役割について考察することで、WUBの実態をグローバルスケール(世界組織)およびローカルスケール(支部組織)に分けて明らかにすることを目的としている。これらのことを明らかにするために、WUB関係者への聞き取り、各支部へのアンケート調査、各種資料の収集を行った。

論文構成は、まず、WUBの概要を紹介したうえで、ⅡではWUBの創設から現在までの世界組織の活動についてWUB会議での議論から時代区分を行い、それぞれの期間の特徵を明らかにする。Ⅲでは支部会員の特徵とその地域性を明らかにしたうえで、支部の活

動を支部内活動，支部間活動とに分けてアンケート結果から考察する。IVではそれらを受けてWUBの機能と役割について考察する。以上を踏まえてWUBの空間性についてまとめる。

2. WUBの概要

「WUB」とは、設立時には Worldwide Uchinanchu Business Association（世界ウチナンチュ・ビジネス・アソシエーション）、2008年以降は Worldwide Uchinanchu Business Network（世界ウチナンチュ・ビジネス・ネットワーク）の略称である。海外に居住する沖縄県系人を中心に、世界的規模の経済、文化、社会活動を通じて地域の発展と繁栄に貢献し、互いに協力連帯することを理念とするグループである。2011年2月現在で日本・沖縄をはじめ、中南米、北米、アジア、ヨーロッパなどに22支部が活動している（図1）。

この組織はハワイ在住の沖縄県系人のビジネスマンたちにより1993年に設立されたHUB⁴⁾を母体としており、世界に広がる沖縄県系人の連携を目的に、HUB会長・ロバート仲宗根氏の提唱により、1997年ハワイで設立された。第1回世界のウチナンチュ会議（2003年）の配布資料によると⁵⁾、組織の目的として次の4点が掲げられている。

- ①ウチナンチュとその心を結ぶ国際的ネットワークを発展させ維持すること。
- ②国際的なウチナンチュ社会にビジネスについての情報を供給すること。
- ③沖縄の文化、教育の交流を手助けすること。
- ④我々の子孫を手助けすることによって世界市民としての視野を普及させること。

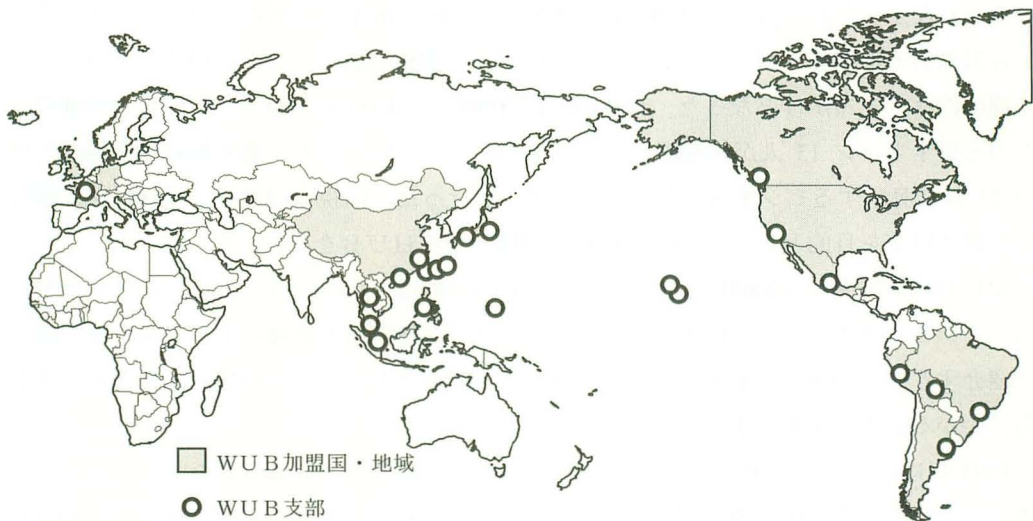


図1 WUB加盟国・地域およびWUB支部（2011年2月現在）

第4回世界のウチナンチュ大会実行委員会事務局（2007）によると、WUBの事業として以下に関することが挙げられる。

- ①国際レベルの経済交流，②国際ビジネスの促進，③国際ビジネス情報の交換，
- ④WUB支部間の連携，⑤会員の研鑽，国際交流，及び親睦，
- ⑥その他，目的達成に必要な事業を行う。

また，同資料によれば，WUB会員の条件として，

- ①国際的なビジネス展開を行っている方，または，希望している方。
- ②国際的なビジネスネットワークに興味のある方で，本会の趣旨に賛同され，本会の理事会の承認を得られた方であれば，職業・国籍・宗教・性別に関わらず入会可。となっており，沖縄県民，沖縄県系人に限らず，門戸の広い組織となっている。

次章では，HUBの設立からWUBの設立，そして現在に至るまで，WUBの展開とその活動の変化をみていきたい。

II. WUBの展開と活動

1. WUBの設立-HUBからWUBへ

先述のとおり，WUBの母体はHUBである。HUBやWUBの設立に関する資料などは極めて少なく，ここでは少ない資料のほかに，WUB創設者であるロバート仲宗根氏の発言⁶⁾を基に，まずHUB，そしてWUBの設立について記述する。

ロバート仲宗根氏によれば，「それまで留学や観光，親戚訪問などを理由に沖縄からハワイへの訪問は盛んであったが，逆にハワイ在住の沖縄県系人が沖縄県に目を向けることはあまりなかった」。しかし，1990年に沖縄県の主催で第1回世界のウチナンチュ大会が宜野湾市の沖縄コンベンションセンターを中心に開催され，この大会が彼らの目を母県沖縄に向けるきっかけとなった。具体的には1993年に同氏を含むハワイ在住の沖縄県系人のビジネスマン13人が「沖縄ビジネス視察団」として来沖し，観光施設や工場など県内25社を見学するビジネススタディーツアーを行った。同視察団はハワイ帰任後，参加者の間で以下を目的として，後にWUBの母体となるHUBを設立した。

WUB沖縄事務局（2007）によると，HUBの目的は，①ハワイと沖縄，その他世界の国々とのビジネスの機会を促進すること，②ハワイの経済人を沖縄および世界の他の国々に紹介すること，③ハワイと沖縄，その他世界の国々とのビジネスの機会の促進やその教育にかかる出版物を発行すること，としている。

1995年には第2回世界のウチナンチュ大会⁷⁾が沖縄県で開催された。このとき，ウチナンチュ民間大使会議の経済部会では「母県と海外及び海外のウチナンチュ相互の経済交流」というテーマで，沖縄県経営者協会会長・稲嶺恵一氏⁸⁾（当時）をコーディネ

ーターに迎え、議論を行った。そのなかで、パネリストとして参加していた当時のHUB会長であるロバート仲宗根氏は、発展する中国の牽引力の一つでもある華僑のネットワークを例に、「沖縄県系人も華僑に倣うべき、世界ウチナンチュビジネスネットワークは可能である」と提唱して賛同を得ている。

翌1996年には、ロバート仲宗根氏を筆頭にHUBの会員は世界各国のウチナンチュを知るべく、ペルーで開催された沖縄県人移民100周年記念行事に出席した（WUB沖縄事務局2007）。そして、そのイベントの一つである「世界のウチナンチュフェスティバル」においてハワイ物産展を開催するとともに、ロバート仲宗根氏によれば、そこで南米在住の沖縄県系人に向けてWUB構想を提案した。

第1回世界のウチナンチュ会議資料（2003）によると、1997年にハワイ東西センターがWUBプロジェクトを支持し、Kenji Sumida 所長はロバート仲宗根氏を同センターの客員研究員に指名した。同年、同センターの同窓生で、当時、琉球銀行頭取であった中山吉一氏が東西センターに資金を寄付した。これを経済的な基盤として、「HUBが中心となり、1997年9月1日、2日の両日、りゅうぎん国際化振興財団、ハワイ東西センター、琉球新報、HUBの共催で、沖縄・日本本土他府県・アメリカ・アルゼンチン・ブラジル・ボリビア・カナダ・フィリピンの世界各地のウチナンチュを集めて、初の「世界ウチナンチュビジネスネットワーク（WUB）会議」⁹⁾がハワイ・ホノルル市において開催され、「WUBを設立すること」が確認され」（WUB沖縄事務局2007）た¹⁰⁾。WUBではこの会議を第1回目のWUB会議とし、この会議をもってWUBの設立としている。なお、第1回世界のウチナンチュ会議資料（2003）によると、同会議にはハワイ以外から約80名が出席していた。

2. WUB会議と支部の設置からみたWUBの変遷

このようにハワイのビジネスマンを中心に、HUB、そしてそれを発展解消する形でWUBが設立された。表1には1990年から2011年までのWUB会議や各種大会と開催地、会議・大会の特徴、および支部設置状況を表した。本稿では、1997年のWUB設立から2011年までの14年間を、WUB会議の特徴からみて3つの期間に分けた。すなわち、WUBの創設期（1997-1999年）、発展期（1999-2007年）、転換期（2008年以降）である。ここでは、それぞれの期間についてWUB会議での会議内容や活動などを通して、WUBの変遷をみている。なお、WUB会議（WUB Conference）という会議名であるが、1997年の1回会議から2010年の14回会議まで通算14回開催されている。ただし、各回の通称は「世界大会」「エグゼクティブ会議」「代表者会議」など様々である。また、ナンバーの付いていない「エグゼクティブ会議」や「代表者会議」もある。本稿においては、会議名称をその会議の性格が表れている通称の方で表記する。

表1 WUBの会議・大会と支部の設立

年	月	会議/大会(開催地)	会議・大会の特徴	設立支部
1990	8	第1回世界のウチナンチュ大会		
1993		HUBの設立		
1995	11	第2回世界のウチナンチュ大会		
1997	9	第1回WUB代表者会議(ハワイ)	WUBの設立	ハワイ, 沖縄, ブラジル, アルゼンチン
1998	2	WUB代表者会議(ハワイ)	WUB正式名称の決定	ペルー, 中国
	6	第2回WUBエグゼクティブ会議(ブラジル)	世界本部・支部組織名の決定	
1999	6	WUBエグゼクティブ会議(ロサンゼルス)	様々なビジネス構想が議論	北米, 東京, グアム
	8	第3回WUB世界大会(ロサンゼルス,ラスベガス)	初の世界大会開催	
2000	6	第4回WUB世界大会(沖縄)	ビジネス交流商談会が初開催	関西, ポリビア
2001	10	第5回WUB世界大会(東京)		香港, ヨーロッパ, シンガポール
	11	第3回世界のウチナンチュ大会		台湾, カナダ, タイ, メキシコ
2002	10	第6回WUB世界大会(ポリビア)	最大の大会参加者	マレーシア, マウイ
2003	8・9	第1回世界のウチナンチュ会議(ハワイ)		フィリピン
	9	第7回WUB会議(ハワイ)		
2004	8	第8回WUB世界大会(アルゼンチン)		
2005	4	第9回WUB世界大会(関西)	WUBと米州開発投資公社(IIC)が 互助協力の覚書に調印	
2006	1	第10回WUB世界大会(ペルー)		
	10	第4回世界のウチナンチュ大会		
2007	9	第11回WUB世界大会(上海)	WUB創設10周年記念大会	
2008	8	第2回世界のウチナンチュ会議(ブラジル)		
	8	第12回WUB世界大会(ブラジル)	WUBネットワークに名称変更	
2009	8	第13回WUBエグゼクティブ会議(ロサンゼルス)		
2010	10	第14回WUB会議(ハワイ)	ウチナンチュスピリット議論	
2011	10	第5回世界のウチナンチュ大会(予定)		宮古

出典：第1回世界のウチナンチュ会議資料(2003), WUB沖縄事務局(2007), 琉球新報関連記事より作成。

1) WUBの創設期(1997-1999年)

1998年2月21日, ホノルルにおいてWUB代表者会議(STEERING COMMITTEE MEETING)が開催され, 次のことが確認された。すなわち, ①組織の正式名称を世界ウチナンチュビジネスアソシエーション(WORLDWIDE UCHINANCHU BUSINESS ASSOCIATION)とする, ②本拠地をホノルルに置く, ③WUBインターナショナル会長(WUB INTERNATIONAL CHAIRMAN)は, HUBのロバート仲宗根氏が務める, ④WUB各支部長は自動的にWUBインターナショナルの副会長(WUB INTERNATIONAL VICE CHAIRMAN)に就任する。

なお, WUBインターナショナルとはWUB支部を統括する世界本部の名称である。さらに, 1998年6月24日には, 沖縄, ハワイ, ブラジル, アルゼンチン, ペルー, ポリビアの各支部代表¹¹⁾がサンパウロに集まり, 第2回WUBエグゼクティブ会議(EXECUTIVE MEETING)が開催され, ①各国支部組織の公式名称の確認, ②世界本部の正式名称をWORLDWIDE UCHINANCHU BUSINESS ASSOCIATION INTERNATIONALとし, その略

称をINTERNATIONALとすること, ③ロゴマークの決定, ④WUB INTERNATIONALの予算組み, ⑤WUB INTERNATIONALへの加入方法, が確認された(WUB沖縄事務局 2007)。

さらに, 1999年6月開催のWUBエグゼクティブ会議では, 各支部の現況報告をはじめ, 8月に開催されるWUB世界大会や次回大会の開催地に関すること, 各WUB支部訪問時の事前連絡方法の確認について議論された。このほか, WUB東京の提案である「株式会社WUBネットワーク東京設立計画」, WUBハワイの提案である「マニファクチャリング・データ・ネットワーク・プロジェクト」, さらに「WUB国際投資会社」の設立などについて議題が上がった。このように, WUBの目的である国際レベルの経済交流や国際ビジネスの促進に向けての様々な構想が各支部から出てきた。

この会議では「マニファクチャリング・データ・ネットワーク・プロジェクト」と「株式会社WUBネットワーク東京設立計画」については継続審議となったが, 「WUB国際投資会社」を設立することは承認されている。この会社は各国のWUB会員の新規事業や有望事業を出資支援すべく, 会員から出資を募って株式会社組織を設立するもので, 沖縄県において法人登記することとなった。

ところで, このような様々なビジネスプランが議論されている一方で, 会議ではWUBはビジネス交流だけではなく, 文化交流や県系人の人材育成にも取り組んでいくことを確認している。確かに, 先述したとおりWUBの目的に「沖縄の文化, 教育の交流を手助け」「我々の子孫を手助けすることによって世界市民としての視野を普及させること」が掲げられてあるように, 非ビジネス分野の活動も組織の目的としている。ここにこの組織の本質は, ビジネス交流と非ビジネス交流が両輪となっていることが指摘されよう。

このような会議と並行して, 支部組織の設立・組織づくりが進められていく。まず, 1997年にはハワイ, 沖縄, ブラジル, アルゼンチンでWUB支部が設立された。翌1998年にはペルーと中国で, 1999年には北米, 東京, グアムの各支部が設立された。沖縄と東京を除くと, いずれも沖縄県系人が多い国・地域であり, 現在においても活発に活動をしている支部である。

このように, 創設期は1997年の第1回WUB代表者会議を含めて4回の会議により, WUB組織の名称や役員, 組織の取り決め, ビジネスプランなどが議論・決定され, 組織の性格が規定されていく。さらに, 県系人の多い国・地域に続々と支部が設立され, WUBの組織としての実態が見えてきた期間といえよう。

2) WUBの発展期 (1999-2007年)

1999年8月9~12日にロサンゼルスウェスティンホテルおよびラスベガスのゴールデンゲイトホテルを会場に, 第3回WUB国際大会が開催された。WUBにとっては初の

世界大会である。重田(1999)の報告によると、大会には正式に支部が設立されていないボリビアを含めて7支部から約70名の会員が参加した。

大会プログラムによると、ハワイ東西センター所長や大学教授の講演のほかに、ビジネスアイデアプレゼンテーションが開催された。そこでは「WUB 投資会社」(WUB 沖縄)、「ハワイ Business Idea」(WUB ハワイ)、「沖縄マガジン S A B A N I」(WUB ハワイ)、「サミット委員会と戦略」(WUB 北米)、「WUBインターネット提案」(WUB 北米)といったテーマでビジネスに関する提案がされた。また、ネットワーキングタイムでは、「インターネット」、「流通」、「建築不動産」、「旅行・観光」、「サミット支援」の各委員会に分かれて、1時間ほど話し合いが行われている。特に、「サミット支援委員会」では、翌年開催される沖縄サミットでどのような形で沖縄を世界にPRできるか、外国在住のウチナーンチュの視点で提言書をまとめ、WUBインターナショナル本部に報告し、これを基に沖縄県に提言するほか、県の施策を支援することが決議された。このように、この国際大会により実質的にWUBの活動がスタートしたといえよう。

翌2000年は沖縄で第4回WUB世界大会が開催された。大会テーマは「21世紀に向け歩もうWUBの仲間」で、大会は大きく分けて講演、文化交流、ビジネス交流、商談会で構成されていた。特に、那覇市の県女性総合センター「ていりる」会場で開催された「国際ビジネス交流商談会」では会員企業のブースが設置され、活発に商談が行われた¹²⁾。このように、この沖縄大会は国際ビジネス交流事業に力を入れた内容となっているのが特徴である。

2001年10月にWUB世界大会が東京で開催された。大会のテーマは「WUB21世紀へ一人、物、情報の継続」である。大会運営を担ったWUB東京では、インターネットなどIT(情報技術)を駆使した新世紀のネットワークビジネスを構築する好機にしようと、大会準備が進められた。WUB東京の総会資料(2000年10月6日付)によると、「参加できなかった沖縄県系人もインターネットで参加できるシステムを確立する。沖縄県系人の物産販売はインターネットという利器を手中にすることにより、より高度な販売戦略が可能となり、沖縄県民へ貢献することが期待される」としている。

2002年10月に第6回WUB世界大会がボリビア・サンタクルスで開催された。琉球新報2002年10月23日付の記事によると、大会参加者は約180名、うちボリビア国外からの参加者は約140名に上り、参加者数だけでみると過去最大規模と報じられている。国際商談会では、牧場と焼肉店を経営するWUB関西副会長(当時)である金城利則氏がボリビアのオキナワ農牧総合協同組合(CAICO)から飼料用大豆を輸入する商談もまとまった。また、国際商品展示会には、各支部が持ち寄った食材や衣類、本が並べられた。

2003年は8月に第1回世界ウチナーンチュ会議が、ハワイ沖縄連合会とWUBハワイの

共催で、ハワイ沖縄連合会が毎年開催している沖縄フェスティバルとタイアップした形で開催された。同会議は、5年に1度の沖縄県で開催となっている「世界のウチナーンチュ大会」の間隔が広すぎる、高齢者の方々は待てないとの声がハワイで上がり、開催に至った。以上の経緯から、ロバート仲宗根氏はこの会議を「世界のウチナーンチュ大会を補完する大会」と位置付けている（2002年7月16日付琉球新報記事）。同会議のプログラムの一つとして、第9回WUB会議が開催された。

それ以降、表1にみられるように、WUB世界大会は第8回・アルゼンチン（2004年）、第9回・関西（2005年）、第10回・ペルー（2006年）、第11回・上海（2007年）と、毎年世界各地で開催され、様々な形で会員のビジネス交流が行われてきた。

発展期における支部設立状況を表1からみると、2000年に関西、ボリビアが設立されたのに続いて、2001年には香港、ヨーロッパ、シンガポール、台湾、カナダ、タイ、メキシコと7支部が設立された。この設立数は他の年と比べて多い。これは同年11月に開催された第3回世界のウチナーンチュ大会を前に、世界各地にWUB支部を設置するべく、WUB役員が奔走した結果である。

第3回世界のウチナーンチュ大会はWUBにとっても重要なイベントである。当時の稲嶺恵一知事も県職員への2001年新年のあいさつの中で、第3回世界のウチナーンチュ大会について「海外県人会、ウチナー民間大使、WUBなどとの国際ネットワークを広げ、相互の未来を切り開くような大会にしたい」（2001年1月4日付琉球新報記事より抜粋）と述べたように、沖縄県からの要請を受け、同大会ではホストとなるWUB沖縄主催でビジネスフェアを開くほか、ゴルフ大会も開催した。WUBがこの時期に支部増設を急ピッチで進めたのは、世界のウチナーンチュ大会を盛会にするための協力、大会をきっかけにWUB組織規模の拡大、沖縄県政や今後WUBの会員になり得る同大会の参加者へのアピール、などが考えられる。

その後、2002年にマレーシア、マウイ、フィリピンの各支部が設立されたあとは、海外支部が設立されていない。これにより、沖縄県系人が集住している国・地域には支部がひとつとおり設立されたと考えられる¹³⁾。

このように、発展期にWUBは21支部体制となり、世界に散在するウチナーンチュビジネスマンを結び付ける地域間ネットワークがほぼ完成し、組織も確立することとなった。そして、「WUB支部間の連携」により毎年開催されたWUB世界大会で「会員の研鑽、国際交流、及び親睦」をしながら、「国際ビジネス情報の交換」「国際レベルの経済交流」による「国際ビジネスの促進」というWUBの事業目的を実行して行った。

その一方で、年を重ねるにつれてWUBの目的や役割、WUBに求めるものに対して会員間にも考えの差異がみられるようになる。2007年の上海大会におけるWUBの今後の課

題に関するパネル討論で行われた議論にそれが集約されよう。新聞報道によれば、

「お祭りや打ち上げ花火的なイベントも大事だが、それだけではビジネスは生まれない」。十九日のパネル討論会場では、ビジネスにつなげる実質的な商談の場の必要性が指摘された。ウチナーンチュとしての意識が薄れつつある若い世代をWUBに引き付けるためにも、目に見えるビジネスが重要だとの意見が上がった。

会員からは「支部の定例会で話し合うのは次回の世界大会のことばかり。現状に不満を持っている会員がいるのは事実だ」「お金を出し世界大会に参加しても、そこでビジネスが成り立たないと次回は参加しないと思う」など、WUBを通じたビジネスチャンスへの「出会い」に期待を寄せる声が相次いだ。

一方「結果的にビジネスや起業につながるのは良いが、それを追求しなくても良いのでは。WUBの活動は外部に評価されるのが目的ではない」との意見も出た。

WUB創設者のロバート仲宗根氏は「WUBにはウチナーンチュという言葉が入っていることに意味がある。ビジネスだけの団体だったら商工会などと変わらない。WUBは道（ネットワーク）をつくった。活用するのは各会員自身だ」と強調する。

（琉球新報、2007年9月21日付）

このように、WUBに対する会員間の認識のずれ、すなわち「ビジネス実利重視派」と「ビジネス - 非ビジネス両輪派」との違いはWUBの設立以来常にみられてきたが、特にこの10周年記念大会でもある上海大会での議論で改めて表出したといえよう。

3) WUBの転換期（2008年以降）

上海大会の翌年である2008年は、ブラジルおよびアルゼンチンにおける沖縄移民100周年という記念の年であった。それに合わせて、8月に第2回世界のウチナーンチュ会議および第12回WUB世界大会がブラジル・サンパウロで開催された。

この時のWUB会議では、組織名を「WUBネットワーク」(Worldwide Uchinanchu Business Network)へと名称変更が決定された。それに伴い、WUBの目的をネットワーク構築に改め、ビジネスだけでなく文化や学術面での県人間の交流、国際人の育成に携わることを確認した。さらに、会員の経済的負担を考慮して毎年開催しているWUB世界大会と支部代表者が集まる理事会（エグゼクティブ会議）を交互に開く方針も了承された。

次の2009年8月にロサンゼルスで開催された第13回WUBエグゼクティブ会議¹⁴⁾ (WUB Network Executive Board Meeting)での議論が、新しい「WUBネットワーク」の方向性を示している。この会議の内容は以下の通りであった¹⁵⁾。

①前会議の議事報告（組織名の変更）

- ②会計報告 (会費, 収支, 同会議への出資増額, 会計後任の承認)
- ③WUB奨学金について (奨学金受賞者, 来年度予算, 寄付金増額)
- ④ウチナーグチース페인語辞書作成プロジェクト
- ⑤WUBからハワイ大学沖縄研究会への寄付金増額
- ⑥2010~2013年のWUBネットワーク会議について (開催地)
- ⑦各支部からの報告 (活動, 不況と新型インフルエンザの影響など)

このように、会議ではビジネスに関するテーマは議題に上らず、WUB奨学金¹⁶⁾と寄付金増額について最も多くの時間が割かれた。すなわち、ビジネスよりも県系人の人材育成や文化活動に重きが置かれている感がある。WUB奨学金を通じた南米県系人とハワイ東西センターとの結びつきなど、これもWUBを介したネットワークの形といえよう。

2010年10月に開催された第14回WUB会議は、「ウチナーンチュトクストーリー」(お互いに語り合う)がテーマであった。会議の様子を伝える新聞報道によると、

第14回WUBネットワーク会議が、ハワイ大学マノア校東西センターで開催された。会議は沖縄という共通する背景を持つ者同士がお互いに歩み寄り、これまでWUBが構築してきたグローバルなネットワークを活用し、信頼を深めていく目的。沖縄、東京、大阪、ハワイ、北米、ブラジル、アルゼンチンなどのWUBネットワーク会員に加え、地元ハワイの沖縄関連組織のメンバーら約150人が参加し、従来にないユニークな会議となった。

会議では10人ごとにテーブルを囲んでグループディスカッションが持たれた。さまざまな職種、組織、世代の人々をミックスして構成された各テーブルでは、ウチナーンチュスピリット(沖縄人の魂)とは、そしてそれがどのように各自の組織に貢献しているか、将来のその姿とは、などをテーマに話し合った。

(琉球新報, 2010年11月8日付)

と報じている。このWUB会議が「ウチナーンチュとは何か」という県系人のアイデンティティに関わることを、他の沖縄関連組織と合同で議論していることは、これもWUBの目指すネットワークの一つの形とも捉えることができる。

このように、2008年の第12回会議で組織名称が変更になったことにあわせて、発展期にみられたビジネス交流が主目的なWUB世界大会型だけではなく、WUBが県系人の人材育成や文化活動を先導し、若い県系人や他の沖縄関連組織を含めてさまざまな人や組織とのネットワーク構築に力をいれるようになったことが転換期の特徴といえよう。WUBがそのようなネットワークの構築が可能であるのは、グローバルに組織展開するWUBだからこそもいえよう。

Ⅲ. WUB支部の会員と活動

前章では設立から現在までのWUB組織全体の動向を、創設期、発展期、転換期と時期区分をして、WUB会議での議論から各時期の活動傾向を考察した。WUBは先述したとおり、2011年2月現在22の支部が活動している。本章では支部に焦点をあて、支部会員の特徴と支部活動について、各支部のホームページや各種資料、そしてアンケート調査から明らかにしていく。アンケートは2009年8月28日に開催された第13回WUBエグゼクティブ会議時に実施した。ここで5支部からの回答を得た。さらに、電子メールでもアンケートを依頼し、4支部からの回答を得た。これにより最終的には、2009年現在に設立されていた21支部中9支部から回答を得ることができた。

1. WUB支部会員の特徴

2011年に設立されたWUB宮古を除いた21支部の会員数と会員の主な事業種を表2に示した。これによると、WUBの全会員は2007年時点で528人である。これを支部別にみると、WUB沖縄の82人が最も多く、次いでWUB東京(73人)、WUBアルゼンチン(70人)、WUBハワイ(60人)、WUB北米(50人)、WUBブラジル(30人)と続く。これらの支部はWUBの創設期から発展期の初期、すなわち1990年代後半に設立されている。支部の会員数が多いため、後述するように支部活動も活発といえる。これに対して、会員数が最も少ないのはWUBタイの4名である。このほか、シンガポール(5人)、カナダ、マレーシア、マウイ、フィリピン(6人)、メキシコ(8人)、香港(9人)の各支部は会員数が10人以下であった。いずれも2001年の第3回世界のウチナーンチュ大会を契機に数多く設立された支部である。会員数が少ないためマンパワー不足で支部活動には制約が多くなると考えられる。

次にアンケートをもとに、回答のあった8支部のみ会員の事業種を設立順にみってみる。なお、アンケート結果は記入者の推測であるため、事業種別人数の数値自体は正確さに欠く。そのため数値はあくまでも支部会員の傾向をみるための参考として利用すべきであることに留意する必要がある。

まず、設立年が最も古いWUBハワイの会員構成についてみていく。WUBの会員の職種は多彩で、アンケートによると、建設業が5人、不動産業、農業、貿易・金融業が3名、観光、IT産業が2人となっている。この表には掲載されていないが、その他法律家、保険業、印刷業も会員である(WUB沖縄事務局2007)。このように、WUBハワイは会員数が多いことに加えて、業種も多岐にわたることが特徴である。

会員数が最も多いWUB沖縄の会員は、サービス業(17人)と製造業(13人)が多く、IT産業(6人)、不動産業(4人)、運輸・貿易業(3人)、建設業(3人)と続く。これは現在の沖縄県の産業構造を基本的には反映した構成となっているが、特に製造業者が多

グローバルに展開する沖縄県系人の組織的活動
 -WUBを事例として- (宮内久光・仲本いつ美)

表2 WUB支部の会員数と会員の主な事業種

支部名	設立年	会員数	会員の主な事業種					
WUBハワイ	1997	60	建設(5)	不動産(3)	農業(3)	貿易/金融(3)	観光(2)	IT(2)
WUB沖縄	1997	82	サービス(17)	製造(13)	IT(6)	不動産(4)	運送/貿易(3)	建設(3) 観光(1)
WUBブラジル	1997	30	製造	サービス	工業			
WUBアルゼンチン	1997	70	貿易(7)	サービス(2)				
WUBペルー	1998	18						
WUB中国	1998	13						
WUB北米	1999	50						
WUB東京	1999	73	サービス(30)	IT(12~13)	建設(4~5)	観光(3)	人材派遣(3)	不動産(1)
WUBグアム	1999	10						
WUB関西	2000	25						
WUBボリビア	2000	20	農業多い					
WUB香港	2001	9						
WUBヨーロッパ	2001	17						
WUBシンガポール	2001	5						
WUB台湾	2001	10						
WUBカナダ	2001	6						
WUBタイ	2001	4	貿易(1)	IT(1)	製造(1)			
WUBメキシコ	2001	8	IT	織物				
WUBマレーシア	2002	6						
WUBマウイ	2002	6						
WUBフィリピン	2003	6						

出典：第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局(2007)およびアンケートより作成。

注：会員数は2007年現在である。会員の主な事業種はアンケート記入者の推計である。

いのは、特産品の海外販路拡大にWUBが期待されているからと推察される。白水(2006)によれば、会員は初代会長の呉屋守将氏が自社の取引相手に声をかけて集まった人々が中心である。現会長の東良和氏は「会員の入れ替えはあるが、(株)お菓子のポルシェ、(株)ぬちまーす、(有)EM商事、香港やシンガポールで20店舗のレストランを運営する又吉さんなど、元気のある企業が入ってきている」と第13回WUBエグゼクティブ会議で報告している。WUB沖縄の会員は、企業の社長や役員が多く名を連ね、法人会員も多い。

WUBブラジルは、製造業、サービス業が多いと回答を得た。ブラジルには大型スーパーや衣料品店などを運営する沖縄県系人も多く、この他には小売業関係者も会員にいと推測される。

WUBアルゼンチンには、貿易関係の職業に携わる会員(7人)が多い。それが要因の一つとなって、後述するように2003年、当時のWUBアルゼンチンの会員71名を株主として日本、アルゼンチン両国の食料品を輸出入し、販売する共進貿易株式会社が設立されたと考えられる。

73名を擁するWUB東京の会員はサービス業(30人)が最も多く、IT産業(12~13人)、建設業(4~5人)、観光業、人材派遣業(3人)と続いている。WUB東京は第3次産業を中心に様々な事業種の会員で構成されているといえよう。なお、WUB東京の重田氏によると、WUB東京は「他支部と比較して際立って沖縄県出身者以外の構成メンバー

が多く」(重田 1999)と述べており、沖縄県系人の組織であるWUBの中では会員構成が特異な支部ともいえよう。

WUBボリビアは、会員は農業が多いとの回答であった。第6回WUB世界大会が開催されたサンタクルス近郊には、沖縄県系人移住地のコロニアオキナワがある。そこは小麦の一大産地で、農業が盛んである。そのため会員にも農業関係者が多いといえよう。

このほか、WUBタイからは貿易業、IT産業、製造業が各1人、WUBメキシコからはIT産業や織物業の会員がいるとの回答を得た。

以上のように、8支部分のアンケート結果だけではあるが、WUB支部会員の事業種構成は第1次産業の農業から、第2次産業の製造業や建設業、第3次産業のサービス業、不動産業、観光産業、貿易業、IT産業に至るまで多岐にわたっており、WUBは様々な業種の交流が可能であることが分かる。そして事業種構成は支部ごとに特徴があり、基本的には例えば、WUB沖縄とWUB東京はサービス業とIT産業が多く、WUBボリビアは農業が多いなど、それぞれの地域における産業構造を反映しているといえよう。

2. 支部の活動

ここでは、各WUB支部における2008～09年度の活動を、アンケート結果に基づきみていきたい。支部の活動は、支部内で行っている活動と、他支部と関係した活動に大別できる。前者の活動として総会や定例会の開催、支部会員の勧誘、支部の事業、会員間のビジネス交流、ホームページの作成・更新などがあげられる。また、後者の活動として、WUB会議への参加、他支部との連絡、会員の支部間訪問の有無、WUBのネットワークを活用した国際的なビジネス活動などが考えられ、それぞれについて問うた。アンケートに回答を寄せた9支部について、ローカルレベルの支部内活動とグローバルレベルの支部間活動を分けて表3をもとに記述していきたい。

1) 支部内活動

ここでは支部内で会員の交流機会や新規会員の勧誘、事業の状況、ビジネス活動、そしてホームページの開設・更新など支部内でのローカルな活動について支部設立年順に見ていきたい。

WUBハワイは毎月定例会を開いているが、総会は開いていない¹⁷⁾。2008年度の事業内容としてホノルル商工会議所の「Super Mixer」というイベントへの展示、意見交換会への参加を挙げている。この他にも、ハワイ沖縄連合会主催のオキナワンフェスティバルでの清掃ボランティアをしている。また、WUBハワイの会員を中心に番組買い付け会社オキ・ビジョン・カンパニーを設立し、ハワイのケーブルテレビ会社ニッポン・ゴールデン・ネットワークに沖縄関係の番組の紹介をしている。このように、WUBハワイは沖縄県の

グローバルに展開する沖縄県系人の組織的活動
 -WUBを事例として- (宮内久光・仲本いつ美)

表3 WUB支部の活動

支部名	WUBハワイ	WUB沖縄	WUBブラジル	WUBアルゼンチン	WUB中国	WUB東京	WUBポリビア	WUBタイ	WUBメキシコ
・総会の開催	△	○6月	×	○9月	×	○5月	回答なし	×	○毎月
・定例会の開催	○12回	○7回	△	○12回	×	○11回	○12回	○年1回	○毎週
・会員勧誘	○	○	○	○	×	○	○	×	○
・支部事業	○	○	○	○	×	○	回答なし	×	○
一事業内容	ホテル商工会議所のイベントへの展示、意見交換会へ参加。 多くの議論があるが、健全なビジネスがなされる可能性がある。	懇親会・定例会の拡充 情報交換・コラボ事業(物販予定)	新しいビジネスを紹介する機会を与える。	ワインの販売を促進とスーパーマーケット共進のアイテム拡大		「WUB東京内で、ビジネスを立ち上げられるか」の検討会 あまりビジネス活動はなく、主に相互の情報交流。			新しいビジネスへの投資と市場の分析
・会員相互のビジネス活動			別々に行われている	具体的な活動はないが、計画はある。	活動なし		回答なし	会員であるラン農園オーナーの商品の日本への輸出を協議	事業のために商品開発をしたり、市場の開拓をしたりしている。
・ホームページ開設、更新	○	○	△	×	×	○	回答なし	×	×
・他支部との連絡	○	○	○	○	×	○	○	×	×
一内容	WUB会議で議論される議題項目及びWUB奨学金について	スケジュール確認・議題について	会議・ビジネスチャンスを広げる	国際的ゴルフトーナメントについて		WUB東京設立10周年懇親会への他支部出席勧誘について	回答なし		
一方法	メール・電話	メール・Skype	メール・Skype	電話・メール・Fax		メール・電話	電話・メール・Fax		
・当支部会員の他支部訪問	○	○	○	○	回答なし	○	○	×	×
一訪問目的	WUBのビジネス、親睦	WUB関西会長の会社の記念式典	親睦・ビジネス	3年前、島の飼料の出荷についてWUBペルーと交渉		親睦	親睦・ビジネス		
・第12回WUB世界大会への参加	○	○	○	○	×	○	○	×	×
WUBネットワークを活用した国際的なビジネス活動	WUBハワイとWUB沖縄の会員間のビジネス関係。沖縄におけるプロジェクトについての相談	沖縄と中国の海運関連・沖縄と香港、シンガポールのイベント関連	ペルーやアルゼンチンのWUB支部会員がブラジルにレストランを開店する際に手助け	WUBアルゼンチンの共進は沖縄の金務商事にワインを加している	回答なし	回答なし	回答なし	回答なし	どのようなことができるのかわからない。

出典：アンケート結果より作成。

PRとなる活動、地元の沖縄県系コミュニティや地域社会に根差した活動を行っているといえよう。アンケートの記述によれば、「WUBハワイの活動は沖縄県政に認められ、支援されている」とある。

WUB沖縄は、6月に総会を開催し、年7回定例会を開催している。支部会員相互のビジネス活動として会員企業によるコラボ事業を挙げている。これは、2009年末のお歳暮商戦に合わせて、会員企業の商品を詰め合わせた「お歳暮セット¹⁸⁾」を開発して会員企業の売り出すという物販共同事業である。商品は酒類や菓子類、調味料など会員企業の商品を集め、パッケージも会員企業が担当するとしている。このほか、英語、日本語、スペイン語の3つの言語に対応できるパスワード制のサイトの制作を進めている。

WUBブラジルでは、総会や定例会を開いておらず、WUB会議の前に会員が集まり、話し合いがもたれている。アンケートの記述によれば、「会員勧誘は資金目当てで会員になろうという人がいると支部の結束が乱れるため慎重に進めている」としている。支部内での事業は、「会員間で新しいビジネスを紹介する機会を与えるように努力しているが、ビジネスそのものはそれぞれの会員間で行なわれている」としている。ホームページの開

設については2009年段階で準備中であつた。

WUBアルゼンチンの活動は、共進貿易株式会社という会社の運営が中心である。琉球新報（2003年3月24日）によれば、WUBアルゼンチンは2003年に当時の支部会員71名を株主として、2万ドルを運営資金とする共進貿易株式会社を設立させた¹⁹⁾。そして、同年4月には味噌や醤油などの日本製品やアルゼンチンの健康食品を取り扱う「スーパーマーケット共進」を、在亜沖縄県人連合会の会館隣に開店した。現在も会社、店舗とも存続し、アンケート記述によると「ワインの販売促進とスーパーマーケット共進のアイテムを拡大する努力」を続けている。

WUB中国は、「2007年に上海で開催された第11回WUB世界大会の準備を行なつたが、それ以外の日常的な活動はしていない」との回答であつた。

WUB東京では、毎月会合があり、そのうち5月に総会を開催している。会員がなかなか平日には集まらないため、休日に会合を持つようにしている。会員勧誘の一環として「ゆんたく会」と称した話し合いの場を設けている。1999年には支部会員有志により「㈱琉橋ネットジャパン」が、2000年にはWUB沖縄とも連携しながら「㈱デジタルあじまあ」がWUBカンパニーとして設立されている。また、これまでに支部会員間で会員会社のパンフレット作成、会員が勤務する旅行社の活用、会員会社や店舗の改修設計や工事、不動産会社の活用、などの受発注の実績があつたとしている。ただ、アンケートによると現在は「あまりビジネス活動はなく、主に（会員）相互の情報交流」を行なっていると回答している。今後は「沖縄の歴史を漫画にして売り出す計画など、小規模でもできることを活動としていきたい」と考えており、「WUB東京内で、ビジネスを立ち上げられるか」の検討会を行っている。

WUBボリビアでは、毎月1回「モアイ（模合）²⁰⁾」と称して定例会を開いている。その際、支部会員以外の県系人にも定例会に参加してもらうように働きかけて、彼らと意見交換・懇親を行っている。それがきっかけでWUB会員になる人もいるとのことなので、定例会は会員勧誘の場としての機能を果たしているといえよう。

WUBメキシコは、会員数は4名と少ないが、毎週会合を持つなど会員同士の交流は活発である。支部エリア内でのビジネスへの関心も非常に高く、支部では「新しいビジネスへの投資と市場の分析」を行ない、「事業のために商品開発をしたり、市場の開拓をしたりしている」とアンケートに回答を寄せるなど、ビジネス活動も活発に行なわれている。

このように、支部内活動をみてみると、アンケートに回答を寄せたWUBハワイをはじめ、会員数が20名以上の主要な支部ではほぼ毎月会合が開催され、会員間の交流の場が設定されていることに加えて、様々な支部事業や会員相互のビジネス活動が行われていることが明らかになった。ただ、全体的には発展期に発案・実行されたビジネス事業の中にはその後運営が行き詰る事例もみられ、転換期の現在は支部自身のビジネス事業よりも、

会員の懇親と情報交換の場を提供することに比重をかけている支部が多くなってきている。このほか、WUB中国やWUBタイ、そして今回アンケート調査に回答がなかった10人以下の支部の中には、会合が開かれず会員の交流がされていないなど、実質的に活動を休止している支部もみられた。

2) 支部間活動

次に、支部間で行なわれているグローバルな活動を、連絡、人的交流、ビジネス交流の点から見ていきたい。

まず、他支部との連絡をしているかについては、WUBハワイ、沖縄、ブラジル、東京、ボリビアは「連絡をしている」、WUBタイ、メキシコ、中国は「連絡をしていない」と回答している。規模が大きな支部ほど他支部との連絡が行なわれる傾向がある。連絡の方法は、全ての支部でメールとSkypeを含めた電話が利用されており、その他、WUBアルゼンチンとボリビアではファックスも併用されていた。このように、メールやインターネット電話など通信技術の進歩が世界に散らばるWUB支部間の結びつきの基盤となっているといえよう。2009年度になされた他支部との連絡の内容は、WUBハワイ、沖縄、ブラジルからはWUBの会議で議論される議題やスケジュールについての打ち合わせが、WUBアルゼンチンや東京からはゴルフ大会や設立記念大会の招待などイベントに関する連絡がなされていた。

人的交流については、まず年1回開催されるWUB会議への出席が挙げられる。アンケートを実施した年はブラジルでWUB世界会議が開催されている。この会議に参加したのは、WUBハワイ、沖縄、ブラジル、アルゼンチン、東京、ボリビアの各支部で、WUB中国、タイ、メキシコは欠席している。

また、2009年度に支部会員が他支部へ訪問したのか尋ねると、これも世界会議参加の状況と全く同じ結果であった。訪問の内容は、WUB沖縄からは「WUB関西会長の会社の記念式典への参加」、WUB東京からは「WUB沖縄やWUB関西との親睦」であった。これが南米の支部になると、「鳥の飼料の出荷についてWUBペルーとの交渉」(WUBアルゼンチン)、南米のWUB支部との「親睦、ビジネス」(WUBボリビア、ブラジル)、などの回答が得られた。すなわち、WUB支部間の人的交流は、WUBハワイを除けば、日本国内の沖縄、東京、関西の3支部間、南米のブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ペルーの4支部間といった同一エリア内の支部間での交流が中心になっている。これは人の移動には時間と費用がかかるため、遠距離の支部との人的交流は日常的には難しく、近接するWUB支部との親睦やビジネス交流が卓越する傾向にあると考えられる。

ビジネス交流についてWUBのネットワークを活用した国際的なビジネス活動の有無と内容を尋ねた。その結果によると、WUBハワイは「WUB沖縄の会員間とビジネス関

係」にあり、「沖縄におけるプロジェクトについての相談」をしている。WUB沖縄は「沖縄と中国の海運関係・沖縄と香港、シンガポールのイベント関連」、WUBブラジルは「ペルーやアルゼンチンのWUB支部会員がブラジルでレストランを開店する際に、出店案内といった手助け」をしている。WUBアルゼンチンは「共進貿易は沖縄の金秀商事にワインを卸している」と回答している。このように、WUBのネットワークを活用したビジネスは主要支部間を中心に実績が認められる。

支部間活動を、連絡、人的交流、ビジネス交流の3点から見てみると、会員規模の大きな支部ほど支部間活動が活発であること、活動をする相手支部は日本国内の支部同士、南米の支部同士といった同一エリア内の交流が中心であること、交流がある支部間では連絡、人的交流、ビジネス交流の3つとも盛んに行なわれるのに対して、交流が少ない支部とはそのどれもが欠ける傾向にあることがわかった。ただ、小規模な支部は一般的にマンパワー不足のため他支部との交流は少ないが、支部内活動が盛んなWUBメキシコからは「ブラジル・アルゼンチンの沖縄県移民100周年記念式典にも自国の経済危機のため参加が不可能であった。他支部とも連絡を取っておらず、同支部会員間で行っている事業の発展に、WUB組織からどのような援助が得られるか分からない」との回答があり、WUBの国際的なネットワークをどのように活用すればよいのか分からないため支部間活動がほとんどない支部もみられた。

IV. WUBの機能と支部の役割

Ⅱ、Ⅲでは世界各地に散らばる沖縄県系人のビジネスマンを中心に組織化されたWUBを対象に、WUBの設立から展開、支部の会員や活動の特徴を考察した。ここではそれらをもとに、WUBの機能、WUBにおける各支部の役割をそれぞれ整理してみたい。ここではWUBの機能を、社会的・文化的機能、経済的機能、相互扶助・親睦機能の3つの観点から記述する。また、各支部の役割はWUBハワイとWUB沖縄を取り上げる。

1. 社会的・文化的機能

まずWUBは、母県沖縄と海外の沖縄県系人を結びつける社会的機能を有している。その中でもWUBと沖縄県政の関係は深く、1997年11月4日、5日の両日、沖縄県、ハワイ州、外務省の共催で「沖縄・ハワイ会合」が沖縄県読谷村で開催され、WUB沖縄が設立された時より始まる。その後、WUBは沖縄県に支部設立の報告や県知事に名誉会長就任の要請などを行っている。逆に沖縄県は世界ウチナーンチュ大会への協力要請をWUBに行い、WUBがそれに応えている。さらに沖縄県は国際交流²¹⁾や国際貿易のビジネスネットワークキングを促進する組織としてWUBを認識し²²⁾、WUBのイベントや事業などの後援を行っている²³⁾。このことは、各国県人会とともに、WUBが世界に在住する沖縄

県系人の代表組織の一つと沖縄県政に認められていることを表している。

また、2008年第12回WUB世界会議以降、WUBは文化活動や人材育成にもさらに力を入れるようになっていく。さらに先述したとおり第14回WUB会議でウチナーンチュとは何か、という議論をセッティングしているように、世界に散在する県系人を精神的に結びつけ纏める文化的な機能も有しているといえる。

2. 経済的機能

WUBの本来的な機能として、会員のビジネスを促進させる経済的機能がある。ビジネス交流の最大場が世界大会であり、先述したとおり沖縄で開催された第4回WUB世界大会の国際ビジネス交流商談会では、全体で具体的な取引商談が63件あった。また、ボリビア大会の国際商談会では、WUB関西副会長（当時）の会社がボリビアのオキナワ農牧総合協同組合（CAICO）から飼料用大豆を輸入する商談もまとまっている。

このほか、先述したとおり、WUBアルゼンチンが鳥の飼料の出荷についてWUBペルーと交渉する、あるいは同支部が設立した共進貿易株式会社がWUB沖縄の会員企業である金秀商事にワインを卸す、WUB沖縄の会員企業が造成したゴルフ場をWUBハワイの会員企業が工事を一部請け負う、といった国際的なビジネス交流がみられた。このようにWUBにはビジネスを促進する機能があるといえる。

3. 相互扶助・親睦機能

2009年の第13回WUBエグゼクティブ会議において、WUB奨学金について（奨学金受賞者、来年度予算、寄付金増額）、ウチナーグチースペイン語辞書作成プロジェクト、WUBからハワイ大学沖縄研究会への寄付金増額といった議題が議論の中心に据えられている。このことから、WUBは人材育成や文化活動助成をとおした相互扶助機能を有しているといえる。WUB奨学金はハワイ東西センターへ留学する南米の沖縄県系人へ与えられ、WUBの非常に重要な事業となっている。

ビジネスでも相互扶助活動がみられる。先述したとおりペルーやアルゼンチンのWUB支部会員がブラジルでレストランを開店する際に、WUBブラジル会員は出店案内といった手助けをしている。

このほか、WUB会議時における懇親会やゴルフ大会、会員の他支部訪問とその対応などWUBには親睦機能が有している。会員間の親睦の中からビジネスに結び付いた例も見られた。

4. WUBにおける各支部の役割－WUB沖縄とWUBハワイ

WUBは2011年2月現在22支部体制である。各支部はWUBのネットワークのノード

であり、WUBの世界組織と同様に、各支部も政治・社会的機能、経済的機能、相互扶助・親睦機能の3機能が程度の差はあるが備えていると考えられる。つまり、WUBの世界組織と各支部は機能の面で入れ子構造になっているといえよう。

さて、22支部の中でも、WUB沖縄とWUBハワイは、WUBのネットワークの中でも特別の役割を果たしている。

WUB沖縄は2008年度の他支部と関係した活動に「ハワイ、北米、シンガポールからの沖縄訪問」を挙げるように、他支部からの訪問を多く受けている。また、様々な沖縄を対象としたビジネスのカウンターパートナーとなっている。このほか、WUB会議の他に「世界のウチナンチュ大会」もあるため、他の支部よりホストとなる回数も多い。このように、WUB沖縄は母県支部として、支部間交流の結節点の役割を果たしている。

さらにWUB沖縄は、沖縄県政に対するWUBの窓口も担っている。例えば、WUB世界大会などで県の後援を要請する場合は、ロバート仲宗根氏をはじめWUB役員と一緒にWUB沖縄の役員も沖縄県庁へ出向いて交渉する。逆に、沖縄県がWUBに世界のウチナンチュ大会協力要請などを行う際は、まずWUB沖縄に連絡するという形になっている。

次にWUBハワイの役割についてみる。WUB各支部の有力な会員と直接つながるWUB創設者ロバート仲宗根氏の個人的な情報網を活かしながら、WUB設立以来、WUBハワイがWUBの様々な活動を積極的に牽引してきた。すなわち、WUBハワイがWUB組織の中心に位置しているといえよう。特に、WUBハワイはWUBの会計事務を担当しているため、WUB会議において特に会計に関わる提案については強い発言力がある。

WUB元会計のダニエル知念氏によれば、WUB会員は各支部を通して、WUBハワイが管理するファンドに年会費一人当たり25ドルを納めることになっている。そして、このファンドの利息分は、WUB奨学金に充てられている。ハワイ東西センターへの南米の県系人留学生に支給されるWUB奨学金制度はWUBにとって極めて重要な人材育成活動である。その奨学金の管理と運営を行っているのもWUBハワイである。

V. おわりに—WUBの空間性

以上のように、本稿では海外に在住する沖縄県系人ビジネスマンを中心に組織化されてグローバルに展開するWUBを対象に、その設立から現在までの世界組織および各支部の活動、支部会員の特徴、世界組織と支部の機能と役割について考察した。その結果をまとめると次のとおりである。

1997年にハワイで設立されたWUBは、2011年現在で日本をはじめ、中南米、北米、アジア、ヨーロッパなどに22支部が設置され様々な活動をしている。毎年開催されるWUB会議の内容と支部設置状況から、WUBの活動は時系列的にみると創設期(1997-1999年)、発展期(1999-2007年)、転換期(2008年以降)に分けられる。

まず、創設期はWUB組織の名称や役員、組織の取り決め、ビジネスプランなどが議論・決定され、組織の性格が規定されていくと同時に、県系人の多い国・地域に続々と支部が設立された期間である。次の発展期はWUBの地域間ネットワークがほぼ完成し、毎年開催されるWUB世界大会で、国際ビジネス情報の交換や国際レベルの経済交流による国際ビジネスの促進というWUBの事業目的を実行していった。しかし、会員間にはWUBの目的や役割について認識のずれが常にみられた。WUBネットワークと改称した以降の転換期になると、ビジネス分野だけではなく、WUBが県系人の人材育成や文化活動を先導し、若い県系人や他の沖縄関連組織とのネットワークの構築に力をいれるようになるなど、非ビジネス分野の活動も重視されるようになった。

WUB支部によって会員数には差異が大きい。また、会員の事業種別構成はサービス業やIT産業を中心に多岐にわたっており、WUBは様々な業種の交流が可能である。そして事業種構成は支部ごとに特徴があり、それはそれぞれの地域の産業構造を反映している。支部活動はローカルレベルの支部内活動とグローバルレベルの支部間活動に分けられる。支部内活動として、WUBハワイなど主要な支部ではほぼ毎月会合が開催され、様々な支部事業や会員相互のビジネス活動が行われている。しかし、小規模な支部の多くは、会合が開催されずに事業もされないなど、実質的に活動を休止している支部もみられた。支部間活動を、連絡、人的交流、ビジネス交流の3点から見てみると、会員規模の大きな支部ほど支部間活動が活発であること、活動をする相手支部は日本国内の支部同士、南米の支部同士といった同一エリア内の交流が中心であること、交流がある支部間では連絡、人的交流、ビジネス交流の3つとも盛んに行なわれるのに対して、交流が少ない支部とはそのどれもが欠ける傾向にあることがわかった。

WUBの機能を社会的・文化的機能、経済機能、相互扶助・親睦機能の3点からみると、まずWUBは母県沖縄と海外の沖縄県系人を結びつける社会的機能を有している。また、文化活動などにより、世界に散在する県系人を精神的に結びつけ纏める文化的な機能も有している。経済的機能としては、世界大会における国際ビジネス交流商談会があげられる。このほか、WUB各支部間で会員企業同士の国際的ビジネス交流がある。相互扶助・親睦機能としては、WUB奨学金による南米出身の県系人青年のハワイ東西センター留学があげられる。このほか、WUB会議時における懇親会やゴルフ大会、会員の他支部訪問とその対応などWUBには親睦機能がある。

最後に海外に散在する沖縄県系組織と移民母県沖縄の結びつきを歴史的に見ながら（図2）、WUBの空間的な意義をみてみたい。

まず、20世紀に入り沖縄（ホームランド）から各国・地域に移民が盛んに行われ、彼らの一部がマクロスケールでは国レベルのホスト社会の中で、あるいはミクロスケールで見れば地域レベルのローカルホスト社会に定着してエスニック集団を形成した。そして、そ

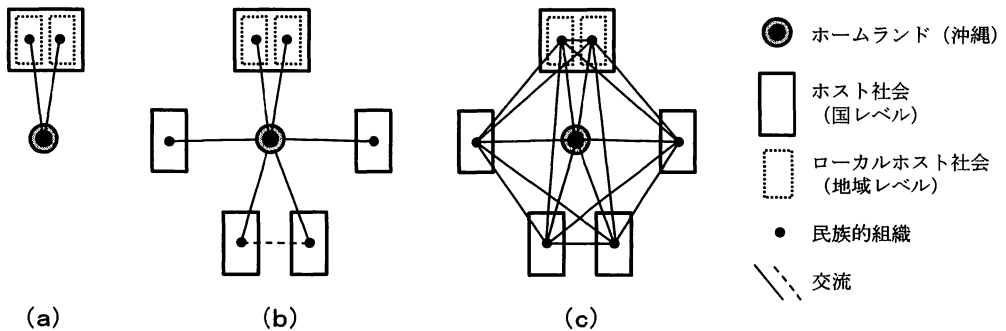


図2 沖縄県系人ネットワークの形態変化

の適応戦略として沖縄県人会あるいは各市町村人会（以下、県人会）といった民族的組織が各地に設立される。それぞれの県人会は母県沖縄とヒト、モノ、カネ、情報の交流が始まる。ただし、基本的には各県人会と母県沖縄とが「1対1」で個別に結び付いている状況である。この段階ではまだ世界規模に展開されたネットワークと呼べる形態とはいえない（図2-a）。

これが、1990年に開催された第1回世界のウチナーンチュ大会により、母県沖縄を結節点とし、各県人会とが結ばれる「1対多」の関係へと変化した。これは白水（2006）が述べたハブ型のネットワーク形態である。ただし、南米の県会同士では交流がみられるなど、局地的に築かれたネットワークもみられた（図2-b）。この段階で沖縄県系人の世界規模のネットワークが築かれたといえよう。

さらにWUBの設立（1997）により、WUB支部が母県沖縄を介さずにお互いが結びつくこともある「多対多」の分散型のネットワークへと再編した（図2-c）。母県沖縄を介さない交流事例として、支部間ビジネスや南米からハワイへの留学制度、世界のウチナーンチュ会議などがあげられる。沖縄県系人の世界規模のネットワークがより深化したといえよう。そして、ここで重要なことは、このような分散型ネットワークを、海外に散在する沖縄県系人が自ら母県沖縄と連携を取りながら構築していったことである。まさに現在は先述したWUB創設者のロバート仲宗根氏の言葉通り、「WUBは道（ネットワーク）をつくった。活用するのは各会員自身だ」という段階に来ているのである。

本稿では、WUBを通して母県沖縄を介さない沖縄県系人の世界規模のネットワークを考察したが、WUBのネットワークは実際にヒト、モノ、カネが動く実態を伴ったネットワークである。実は沖縄県系人の世界的ネットワークはそれだけにはとどまらない。IT技術の発達により、近年世界に散在する沖縄県系の青少年を中心にサイバーネットワークが構築され、サイバー空間で盛んに情報交換がなされている。このような実態を伴わない世界規模の沖縄県系人ネットワークの解明については、今後の課題としたい。

謝辞

本論文を作成するにあたり、聞き取り調査に協力していただきましたWUB創設者のロバート仲宗根様をはじめ、WUB沖縄会長東 良和様、元WUB会計ダニエル知念様、ならびにアンケートに回答していただいた各国・地域のWUB支部の皆さまに心よりお礼と感謝を申し上げます。

注

- 1) インド系移民では、1989年に第1回インド系移民世界大会（The First Global Convention of People of Indian Origin）が開催され、インド系移民世界組織（Global Organization of People of Indian Origin, 略称 GOPIO）が結成された（古賀 2000）。さらに、中国の少数民族である客家では、1971年に「世界客属懇親大会」が開催されている（緒方 2002）。
- 2) 丸屋（1994）は華人の経済的なネットワークが、単なる地縁、血縁ネットワークから経済的なメリットを生み出す情報ネットワークへと広がっていることを指摘している。
- 3) なお、広瀬（2007）によると、NRIとは非居住インド人（Non Resident Indian）の略称で、インドパスポートを保持しながら、外国に住んでいる人々を指す。
- 4) HUBとはHawaii Uchinanchu Business Groupの略称である。
- 5) 第1回世界のウチナーンチュ会議資料は全編英語表記のため、本稿に掲載された文章は全て筆者による日本語訳である。
- 6) ロバート仲宗根氏の発言は、第13回WUBエグゼクティブ会議（2009年8月28日）における同氏の「WUBネットワークと世界ウチナーンチュ」をテーマにしたスピーチを基にしている。なお、スピーチは全て英語で行われたため、本稿に載せた文章は同時通訳を介した日本語訳である。また、補足として2009年10月16日に同氏が来沖した際に、筆者の一人が琉球大学で行った聞き取りも内容に含まれている。
- 7) この大会でHUBは会場内にビジネス展覧セクションを設けている。
- 8) 稲嶺氏は後に第5代沖縄県知事（1998-2006）を務めた。
- 9) この会議名からもわかるように、組織の正式名称が決まるまで会員の間で、この組織はアソシエーションやインターナショナルではなく、ネットワークと称されていた（WUB沖縄事務局 2007; p.2）。
- 10) このとき、地域設立世話役人として、南米地域・与那嶺氏（在ブラジル）、北米地域・当銘氏（在ロサンゼルス）、アジア地域・人選中、日本地域・呉屋守将氏（金秀本社長）が選出され、地域設立世話役人は各地域に早急に支部を設立することが確認された（WUB沖縄事務局 2007）。
- 11) この会議の段階ではボリビアは正式には支部が設立されていない。

- 12) 国際ビジネス交流商談会は、57 企業 59 ブースが出展し、2 日間で約 1,350 名が参加した。全体で具体的な取引商談が 63 件あり、うち 58 件は「可能性が見込まれる」とされる。また、「アガリクス製品の輸出商談」「沖縄の芸能・文化ビデオ販売代理店契約の商談」「DVDビデオとフルCGムービーの販売」など7件について商談がまとまった(2000年9月16日付琉球新報記事)。
- 13) ダニエル知念氏(WUBハワイ)によれば、オーストラリアにWUB支部を設立するという話もち上がったそうだが、2009年の第13回WUBエグゼクティブ会議では、その話題は上がらなかった。
- 14) 本来はロサンゼルスでWUB世界大会を開催する予定であったが、WUB沖縄会長・東良明氏への聞き取りによると、世界的な不況や新型インフルエンザの影響で会員企業の負担が大きく、世界大会を開かずエグゼクティブ会議に規模を縮小したという。
- 15) 筆者の一人が特別に会議の傍聴を許されて、その時のメモによる。
- 16) WUB奨学金とは、南米の沖縄県系人にハワイ東西センターへ留学する機会を与えるべく、奨学金を授与する制度である。
- 17) ただし、2008年度の総会の代わりとなる会を、ホノルルでのオキナワンフェスティバル、ブラジルとアルゼンチンでのWUB会議といったイベントに合わせて開いている。
- 18) お歳暮セットの内容は、オリオンビール(オリオンビール株式会社)、塩胡麻ちんすこう(㈱お菓子のポルシェ)、アセロラドレッシング(㈲EM商事)、ぬちまーす(㈱ぬちまーす)で、WUB関西の会員会社が発行する2010年の開運暦が付く。
- 19) 社長には、宜野座村出身一世で、靴専門のチェーン店やパラグアイで製材所を営む屋宜宣太郎氏が就任した。
- 20) 頼母子講のこと。
- 21) 2002年2月21日の沖縄県議会で稲嶺恵一知事(当時)は国際交流事業の推進について「ワールド・ウチナンチュ・ビジネス・アソシエーション(WUB)等の活動を促進し、世界各地とのネットワークの拡充・発展に努めます。」と表明している。
(<http://www2.pref.okinawa.jp/oki/Gikairep1.nsf/f2d4b51dfefc430f492567220015ee7a/1112fb5f689b008a49256bc6000a5f29?OpenDocument>, 最終アクセス日:2011年2月20日)
- 22) 2002年策定の沖縄県文化振興計画の関連施策一覧表には商業貿易課(当時)の所管として「県内、県外及び海外県系人等の経済人等で組織するWUBとの連携を図るとともにウチナンチュ・ネットワークの拡充を促進し、県産品等の販路拡大を図る。」とWUBが明記された。
(<http://www.pref.okinawa.jp/bunshin/con2/new-page/kan.pdf>, 最終アクセス日:2011年2月20日)
- 23) 例えば、ハワイの「第1回世界ウチナンチュ会議」への沖縄県の後援、ボリビアの

WUB 世界大会の中で行われた「世界ウチナンチュゴルフ大会」への「沖縄県知事杯」提供、沖縄県から 100 万円の助成を受けた WUB 全体を網羅するようなサイト開設、などがあげられる。

文献

- 緒方 修 2002. 『世界客家大会に行く』現代書館.
- 古賀正則 2000. インド系移民の国際的ネットワーク. 古賀正則・内藤政雄・浜口恒夫編『移民から市民へ—世界のインド系コミュニティ』249-265. 東京大学出版会.
- 重田辰弥 1999. 第3回WUB世界大会(ロス大会)参加報告.
(<http://www.wubtokyo.com/hp/topics/19990809/19990809.htm>, 最終アクセス日: 2011年2月20日)
- 白水繁彦 2006. ウチナンチュ・スピリットのゆくえ—エスニシティで繋がる世界—. コミュニケーション科学 24: 57-64.
- 杉浦 直 1991. 日系人社会と民族的組織. 地理 36 (5): 41-47.
- 陳 天璽 2001. 『華人ディアスポラ—華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店.
- 広瀬崇子 2007. 海外で活躍するインド人のネットワーク. 広瀬崇子・近藤正規・井上恭子・南埜 猛編: 『現代インドを知るための60章』325-330. 明石書店.
- 矢ヶ崎典隆 1980. 北カリフォルニアにおける日系人花卉栽培の形成—民族的組織化と移民農業—. 地学雑誌 89 (3): 1-18.
- 矢ヶ崎典隆 1983. 南カリフォルニアにおける第二次世界大戦前の日本人農業と民族的組合組織. 地学雑誌 92 (2): 1-18.
- 矢ヶ崎典隆 2008. 2 エスニック集団の適応戦略. 山下清海編『エスニック・ワールド 世界と日本のエスニック社会』20-27.
- WUB 沖縄事務局 2007: 『WUB 沖縄のご案内 ~第11回 WUB 世界大会 中国上海 2007 プレス集~』WUB 沖縄.
- 山下清海 1987: 『東南アジアのチャイナタウン』古今書院.
- 山下清海 1988: 『シンガポールの華人社会』大明堂.
- 山下清海 2002: 『東南アジア華人社会と中国僑郷—華人・チャイナタウンの人文地理学的考察—』古今書院.
- 丸屋豊二郎 1994: 増え続ける華人・華僑資本の対中投資. 渡辺利夫編『華人経済ネットワーク』49-85. 実業之日本社.

(みやうち ひさみつ・琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門教授・人文地理学,
なかもと いつみ・国頭村役場・人文地理学)

**The Systematic Efforts of an Okinawan Descents Group to Develop
into a Global Organization
- WUB: A Case Study -**

Hisamitsu MIYAUCHI* and Itsumi NAKAMOTO**

*International Institute for Okinawan Studies, University of the Ryukyus

**Kunigami Village Government

(Human Geography)

Keywords: WUB, Okinawan descents group, Network, Business exchange

This study researched the organization WUB (Worldwide Uchinanchu Business Network), which was formed by Okinawan descent businessmen, and investigated WUB's activities, membership, features and function from its establishment until present day. The results are as follows.

WUB was founded in Hawaii in 1997. As of 2011, there are 22 WUB chapters located in: Japan, Latin America, North America, Asia, and Europe, with various activities. WUB's history can be divided into three phases: the founding period (1997-1999), the development period (1999-2007), and the transition period (2008 - present).

During the foundation period, the name of the association, board members, rules, and business plans were discussed. During the development period, international economic/business exchange/meetings were actively conducted at WUB worldwide conferences. Also, some WUB chapters created new businesses. During the transition period, WUB became involved with not just the business area, but also non-business areas, such as cultural activities and assisting in the development of young Okinawans.

WUB members are in the business of: agriculture, manufacturing, the service industry, IT, foreign trade, etc. Therefore, WUB provides a platform for various kinds of business exchange and networking.

WUB chapters hold meetings and business activities which build fellowship between members. Also, there is communication and business exchange between different chapters. However, there are small chapters which are not as active.

Recognized functions of WUB include:

- (1) providing a connection between the Okinawa Prefectural Government and overseas Okinawans,
- (2) connecting Okinawan people all over the world mentally, spiritually, and culturally,
- (3) providing economic benefit via business exchange,
- (4) awarding WUB scholarships and other assistance and support, and
- (5) creating fellowship.